

瘤とり

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、ある所ところに、一人ひとりのおじいさんがありました。右みぎのほおにぶらぶら大きな瘤こぶをぶら下さげて、始し終じゆうじやまそうに
していました。

ある日、おじいさんは山へ木を切きりに行きました。にわかかにひ
どい大なあらしになつて、稲いな光ひかりがびかびか光ひかつて、ごろごろ雷かみなり
が鳴なり出だしました。そのうち雨あめがざあざあ降ふつてきて、うちへ帰かえ
るにも帰かえれなくなりました。どうしようかと思おもつて見回みまわしますと、
そこに大きな木のうろを見みつけました。しかたがありませんから、

その中に入はいって、雨あめの小こやみになるのを待まっているうちに、いつか日ひはとつぷりくれてしまいました。

深ふかい山の中には、もうきこりの木を切きる音おともしません。木のうろの外そとは、一面真めんまつ暗くらやみの中に、すさまじいあらしが、うなり声こえを立てて通とおっていただけです。

おじいさんはこわくって、こわくって、たまらないので、夜通よとおし目めも合あわずに、うろの中に小ちいさくなっておりました。

夜中よなかになって、雨あめがだんだん小降こぶりになり、やがてあらしがぱったりやみますと、はるか高たかい山の上から、なんだか大おおぜいがやがや騒さわぎながら、下おりてくる声こえがしました。

おじいさんは今いままで一ひとり人ぼっちで、寂さびしくってたまらなかつた

ところですから、声を聞くとやっと生き返ったような気がしました。

「やれやれ、お連れが出来て有り難い。」

といいながら、そつとうろの中から顔を出してのぞいてみますと、まあどうでしょう、それは人ではなくって、ふしぎな化け物が、何十人となくぞろぞろ出てくるのです。青い着物を着た赤鬼もいました。赤い着物を着た黒鬼もいました。それが山猫の目のようにきらきら光る明かりを先に立てて、どやどや下りてくるのです。

おじいさんは肝をつぶして、またうろの中へ首を引つ込めてしまいました。そしてぶるぶるふるえながら、小さくなって息を殺

していました。

鬼どもはやがて、おじいさんの居るうろの前まで来ますと、がやがやいいながら、みんなそこに立ち止まってしまいました。おじいさんは、「おやおや。」と思ひながら、いよいよ小さくなつていきますと、そのうちのおかしらしいのが、真ん中に座つて、その右と左へ外の鬼たちがずらりと二かわに並びました。よく見ると目の一つしかないのや、口のまるでないのや、鼻の欠けたのや、それはそれは何ともいえない気味の悪い顔をした、いろいろな化け物が押しくらをしておりました。

そのうちお酒が出来ますと、みんなお互いに土器のお杯をうけたり、さしたり、まるで人間のするとおりの、楽しそうなお酒

盛りがはじまりました。

お杯さかずきの数かずがだんだん重かさなるうちに、おかしらしい鬼おには、だれよりもよけいに酔よつて、さもおもしろそうに笑わらいくずれていました。すると下座しもぎの方ほうから、一人ひとりの若い鬼おにが立たつてきて、お三方さんほうの上に食たべ物ものをのせて、おそろおそろおかしらの鬼おにの前まえへ持つて出でました。そして何かなにわけの分わからないことをしきりにいつているようです。おかしらの鬼おにもお杯さかずきを左ひだりの手に持もつて、おもしろそうに笑わらいながら聞きいています。その様子ようすは少すこしも人にんげん間まと違ちがったところはありませぬ。

やがておかしらは、

「さあだれか歌うたを歌うたう者ものはないか。踊おどりを踊おどる者ものはないか。」

と行って、そこらを見回みまわしました。

やがておかしらのそばに座すわつていた鬼おにが、出し抜けぬに大きな声こえで歌うたを歌うたい出だしました。するとさっきの若い鬼わかおにも、すその方ほうから前まえへ飛とび出だしてきて、さんざん踊おどりを踊おどつて引ひつ込こみました。それから代かわる代がわる下座しもぎの方ほうから、一人一人違ちがつた鬼おにが立たつてきて、同おなじように踊おどりを踊おどりました。中なかには上じょう手ずに踊おどつてほめられる者ものもあれば、ぶきような踊おどり方かたをして、みんなに笑わらわれる者ものもありました。踊おどりがすむたんびに、ひんながばちばち手をたたいて、

「よいよい。」

とはやしました。

おかしらの鬼おにはその時とき、さもゆかいそうに高笑たかわらいをして、

「あツは、あツは。おもしろい、おもしろい。今夜こんやのようなゆかいな宴えんかい会ははじめてだ。だがついでにだれか、もつとめずらしい踊おどりを踊おどつて見みせる者ものはないか。」

といいました。

おじいさんはさつきから、木のうろの中で体からだをこごめながら、それでもこわいもの見みたさに、首くびだけのぼして外そとの様子ようすをのぞいていました。そのうちに、いったいがひようきんなおじいさんのことですから、いつかこわいのも何なにも忘わすれてしまつて、見世物みせものでも見みている気きで、おもしろがつて鬼おにの踊おどりを見物けんぶつしていました。するうちに自分じぶんもだんだん浮うかれ出だしてきて、今いまのおかしらの鬼おに

のいったことばが耳みみに入ると、自分じぶんもひとつ飛び出だして、踊おどりを踊おどつてみたくなりました。

しかしうっかり飛とび出だしていつて、一口ひとくちにあんぐりやられては大たいへんだと一度どは思おもい返かえして、一生いっしょう懸命けんめいがまんしていましたが、そのうち鬼おにどもがおもしろそうに手をたたいて、拍ひょう子をとり出だしますと、もうたまらなくなつて、

「ええ、かまうものか。出おて踊おどつてやれ。食くわれて死しんだらそれまでだ。」

とすっかり度ど胸ぎょうをきめて、腰こしにきこりの斧おのをさして、烏帽えぼし子をずるずるに鼻はなの頭あたままでかぶつたまま、

「よう、こりやこりや。」

といいながら、ひよっこりおかしらの鬼おにの鼻先はなさきへ飛び出としました。

あんまり出し抜ぬけだものですから、こんどはおじいさんよりは、鬼おにの方がびつくりしてしまいました。

「何なんだ。何なんだ。」

「人間にんげんのじじいじゃないか。」

といいながら、みんなはそう立ちだになつて騒さわぎました。

おじいさんはもうすましたもので、一いっしょう生懸命けんめい、のびたり、ちぢんだり、縦たてになり、横よこになり、左ひだりへ行き、右みぎへ行き、くるりと木きねずみのように、元氣げんきよくはね回まわりながら、

「よう、こりやこりや。」

とお酒さけに酔よったような声こえを出だして、さもおもしろそうに踊おどりま
した。

だんだん鬼おにどももみんな釣つり込まれて、いつしよに手拍子てびょうしを
合あわせながら、

「うまいぞ、うまいぞ。」

「しつかりやれ。」

こんなことをいいながら、はちきれそうな大おお笑わらいをして、お
じいさんの踊おどりに夢むちゆう中ちゆうになつていました。

踊おどりがすむと、おかしらも感かん心しんして、おじいさんに、

「こんなおもしろい踊おどりははじめてだ。じいさん、明日あすの晩ばんも来き
て、踊おどりを踊おどるのだぞ。」

と良かったです。

おじいさんはとくいになつて、

「へえへえ、おいしいつけがなくともきつとまいりますよ。今こんばん晩ばん

は何なにしろ急きゆうなことで、おけいこをして来きませんでしたから、明日あす

の晩ばんまでには、ゆつくりおさらいをしてまいりましたよ。」

こういうと、その時とき右手みぎての三さんばんめに座すわつていた鬼おにが口くちを出だし

て、

「いいや、ああはいつても、その場ばになると横おうちやく着やくをきめて出で

てこないかも知しれません。約やく束そくを違ちがえさせないために、何なにか、

しちに取とつておいてはどうでしょう。」

と良かったです。

おかしらは、

「なるほどそれはいいだろう。」

とうなずきました。

「それでは何がいいだろう。何を取り上げておいたものだろう。」

と鬼どもは、わいわい相談をはじめました。

「烏帽子がいい。」という者もありました。

「斧はどうだ。」という者もありました。

おかしらはみんなの騒ぐのを止めて、

「いや、何よりもいちばん、あのじいさんのほおの瘤を取るの

いいだろう。瘤は福のあるものだから、じいさんのいちばん

じなものに違いない。」

と良かったです。

おじいさんは心こころの中なかでは、「しめた。」と思おもいながら、わざとびつくりした風ふうをして、

「おやおや、とんでもないことをおつしやいます。目玉めだまを抜ぬかれまして、鼻はなを切きられましても、この瘤こぶを取とることだけはどうかごかんべん下くださいまし。長年ながねんの間あいだ、わたくしが宝たからのようにしてぶら下げている、だいじな瘤こぶでございますから、これを取とり上げられましては、ほんとうに困こまってしまいます。」

と良かったです。

鬼おにのおかしらはこれを聞きくと、

「それ見みろ。あのとおりに惜おしがっている瘤こぶだ。あれに限かぎる、取とり

上げておけ。」

といいました。

てした
おに
手下の鬼はすぐそばへ寄つてきて、

「それ、とるぞ。」

といいながら、ぽきりと瘤をねじ切つてしまいました。でも少しも痛くはありませんでした。

ちょうどその時、夜が明けて、からすがかあかあ鳴きました。

「やあ、大へん。」

おに
鬼どもはびっくりして、立ち上がりました。

あす
ばん
「明日の晩はきつと来い、瘤を返してやるから。」

こういいながら、みんなあわててどこかへ消えていきました。

おじいさんはその後で、そつと顔をなでてみました。そうすると、長^{ながねん}年じやまにしていた大きな瘤^{こぶ}がきれいに無^なくなつて、後^{あと}はふいて取^とつたようにつるつるしていました。

「これは有^あり難^{がた}い。ふしぎなこともあるものだ。」

おじいさんはうれしくつてたまらないので、早^{はや}くおばあさんに見^みせてよろこばしてやろうと、首^{くび}を振^ふり振^ふり、急^{いそ}いでうちまで駆^かけて帰^{かえ}りました。

おばあさんは、おじいさんの瘤^{こぶ}がきれいに取^とれているので、びつくりして、

「おや、瘤^{こぶ}をどこへやったのです。」

と聞^ききました。おじいさんはこういうわけで、鬼^{おに}がしちに取^とつ

て行つたのだといいました。おばあさんは、

「まあ、まあ。」

といって、目をまるくしておりました。

二

さてこのお隣のうちにも、これは左のほおに、やはり同じような瘤のあるおじいさんがありました。おじいさんの瘤のいつの間にか無くなつたのを見て、ふしぎそうに、

「おじいさん、おじいさん、あなたの瘤はどこへいきました。だれか上手なお医者さまに切ってもらつたのですか。どこだかそ

のお医者さまのうちを教^{おし}えて下^{くだ}さい。わたしも行^いつて取^とつてもらいましよう。」

とうらやましそうにたずねました。

おじいさんは、

「なあに、これはお医^{いしや}者さまに切^きつてもらったのではありません。ゆうべ山の中で鬼^{おに}が取^とつていったのです。」

といいました。

するとお隣^{となり}のおじいさんはひざを乗^のり出^だして、

「それはいったいどうい^かうわけです。」

と、びつくりした顔^{かお}をしました。

そこでおじいさんは、こうい^かうわけで踊^{おど}りを踊^{おど}ったら、後^{あと}でし

ちに取り^とられたのだといって、くわしい話^{はなし}をしました。お隣^{となり}のおじいさんは、

「いいことを聞^きいた。ではわたしもさつそく行^いって踊^{おど}りを踊^{おど}りましょう。おじいさん、その鬼^{おに}の来^くる所^{ところ}がどこだか、教^{おし}えておくんなさい。」

といました。

「ああ、いいとも。」

とおじいさんはいって、くわしく道^{みち}を教^{おし}えてやりました。

おじいさんは大^{たい}そうよろこんで、あたふた山へ出^いていきました。そして教^{おそ}わった木のうろの中へ入^{はい}って、こわごわ鬼^{おに}の来^くるのを待^まっていました。

なるほど、話はなしに聞きいたとおり、夜中よなかになると、何なん十人にんとなく青あおきもの着き物ものを着きた赤あか鬼おにや、赤あかい着き物ものを着きた黒くろ鬼おにが、貂てんの目めのようにきらきら光ひかる明あかりをつけて、がやがやいいながら出でてきました。

やがてみんなはゆうべのように木まのうろの前まえに座すわつて、にぎやかなお酒さかも盛りもりをはじめました。

その時ときおかしらの鬼おにが、

「どうした。ゆうべのじいさんはまだ来こないか。」

といました。

「どうした、じい、早くはや出でてこい。」

手て下したの鬼おにどももわいわいいいました。

お隣となりのおじいさんは、それを聞いて、「ここだ。」と思つて、

こわごわうるの中からはい出だしました。

するとひとりの鬼おにが目めばやく見みつけて、

「やあ、来きました、来きました。」

といました。

おかしらは大おおよろこびで、

「おお、よく来きた。さあ、こつちへ出て、踊おどれ、踊おどれ。」

と声こえをかけました。

おじいさんは、おっかなびつくり立たち上あがって、見みるからぶき

ような手てつきをして、でたらめな踊おどりを踊おどりました。おかしらの

鬼おにはふきげんな顔かおをして、

「今日きようの踊りおどは何なんだ。まるでまずくつて見てみいられない。もういい。帰かえれ、帰かえれ。おい、じじいに、ゆうべのあずかりものを返かえしてやれ。」

とかんしやく声こゑでいいました。

すると下座しもぎの方ほうから若い鬼わかおにが、あずかつていた瘤こぶを持もつて出て、

「それ、返かえすぞ。」

とわめきながら、瘤こぶのない右みぎのほおへぼんとたたきつけました。
お隣となりのおじいさんは、

「あつ。」

とさげびましたが、もう追おつつきませんでした。両方りょうほうのほ

おへ二つ瘤こぶをぶら下さげて、おいおい泣なきながら、山くたを下くだつて行き

ま
し
た。
。

青空文庫情報

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2006年7月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

瘤とり

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>